

梅かおる曾我兄弟ゆかりの里を訪ねて

2023.2.16

酒井 郁子 記



あれはいつのことだったでしょう。小雨降る曾我丘陵を、曾我十郎五郎の史蹟を訪ねる一団は、まるで巡礼のようでした。寒い寒いと手をこすりながらも、皆で励まし合い寺社を丁寧に見て歩き… というのは冗談ですが、下曾我探訪の日は、晴れの天気予報がはずれ、雨が降ったり止んだりの寒い日でした。

曾我兄弟がこの地に住んだのは、兄弟の実父が工藤祐経に討たれてから、仇討へと旅出するまでの17年間。それでも後世の人々は、ドラマチックな曾我兄弟の運命に魅かれるのか、彼等にまつわる人々の痕跡がこの地には残されています。兄弟が身を寄せた曾我一族の館、終生かけて彼らの菩提を弔った母の墓。養父曾我祐信の供養塔は、里を見守るかのように曾我山の中腹に建立されています。

当日の参加者は41名。曾我山の中腹まで上がる健脚コース、低地のみを廻るゆっくりコース、その中間コースの3グループに分かれて曾我の里を巡りました。解散場所は、下別所の梅林近くのバス停。梅は盛りの時期で、人家の間を埋め尽くす梅林は可憐な白い花で満ちていました。解散後は各々観梅の宴に… と第2のお楽しみ時間となるはずでしたが、生憎の雨は強まる一方で皆真っすぐに帰路へと向かっていきました。

下の写真は、筆者が探訪の翌週訪れた曾我の里。丘陵の裾野にある里ですから、高台に上ると眼下には白梅の絨毯が里の彼方此方に敷き詰められているようでした。

(参加者41名)



城前寺にある曾我兄弟発願



養父・曾我祐信供養の宝篋印塔



曾我丘陵から小田原城下を望む (探訪の翌週撮影)